

## Captain English Course I,II Revised

# 「異文化理解」が授業を変える



海木幸登

### ■英語の楽しみ、英語の魅力

あらためて言うまでもないことだが、私たち英語教師は、英語学習にはいろんな楽しみがあることを知っている。英会話やコミュニケーションはもちろん、英語の歌や映画が好きな人もいれば、教科書の音読や翻訳、あるいは英語の物語を読むのが楽しいという人もいる。

まことに人それぞれだ。

私の場合、初めて外国の人と英語で話したのは中学3年生の時だった。友だちと遊びに行った海岸で観光客らしき人に話しかけたのだが、あの時の「(自分がいま習っている)英語が通じた!」という驚きとうれしさは忘れることができない。

また、『サウンド・オブ・ミュージック』や『ローマの休日』などを見て、初めて映画のセリフがいくつか聞き取れた時も感激だった。

英語の歌も同様で、『ドレミの歌』や『ロミオとジュリエット』、あるいはカーペンターズやビートルズなど、けっこう歌詞の内容が分かってくれしかったものだ。メロディーに合わせて、お気に入りの歌を何度も歌ったことを覚えている。

### ■異文化が高める生徒の意欲

ところで、生徒たちには、「世界の旅」「世界の祭」「世界の食事」など、異文化理解に関するものも人気がある。誰でも外国へ行けるような時代になったこともあり、世界の国々がますます身近な存在になっているのかもしれない。

*Captain* では、“It’s Yummy!” (I, 第3課) でメキシコのタコスを取り上げ、“Seven Wonders Around the World” (II, Have a Break!

2) で世界遺産を取り上げている。また、“The World Is Full of Wonders” (II, 第4課) は、氷のホテル (スウェーデン)、青く光る神秘的な湖 (プエルトリコ)、キリン保護区の中にあるホテル (ケニア) など、ちょっとユニークな視点から世界に広がる異文化を紹介しているので、生徒には魅力的だろう。

教材そのものが魅力的なので、肩の力を抜いて教科書通りに進めていくだけでも十分楽しい。

しかし時間がとれるようなら、『世界の食卓—世界24カ国の家族のごはん』『地球家族—世界30カ国のふつうの暮らし』『続地球家族—世界20カ国の女性の暮らし』(TOTO 出版) などの写真を使って、話題を広げてみるのはどうだろうか。

たとえば『世界の食卓』には、1週間分の食料を前に家族全員が写っている写真が載っているし、『地球家族』には、外へ運び出した家具といっしょに、これも家族全員が写っている。

使い方のヒントはそれぞれの書籍に任せるとして、ここから生徒が何を感じるかは実際にやってみてのお楽しみだ。社会的な内容でもあり、教科にこだわらず、図書館に置く価値はある。

また、*Student Times* や *Asahi Weekly* など週刊英字新聞にはたいてい Travel のコーナーがあり、世界の国々の今が紹介されている。

数週間分集めれば、ALT に簡単な英語の説明をつけてもらって、教室に貼りめぐらすといい。

ちょっとした工夫で、教室が地球村に早変わりすることになる。

また、*Joyful Watching* や *Welcome to My*

Country! (浜島書店) など、世界の異文化や世界の国々を取り上げた読物が各社から出ているので、*Captain* とあわせて利用する手もある。

### ■世界の旅に出かけよう！

さて、せっかくの“世界の旅”なので、写真や新聞記事だけではなく、思い切ってもっと時間をとるのもいい。*Captain II Revised* の Communication 2「旅に出よう」とからめれば実行しやすいだろう。

たとえば私の場合、パスポート申請用紙(本物)をもらってきて必要枚数印刷し、実際に書き込むという授業をやったことがある。

それだけでなく、パスポートも、ちょっと厚めの紙に印刷して作ってしまう。そして、ALT に空港の係員役をやってもらい、出入国の会話などを練習する。うまく会話が進めば、パスポートにスタンプを押すと海外旅行の雰囲気が出る。

また、グループごとにお薦めツアーのプランをつくるという活動も盛り上がった。生徒は旅行会社へ足を運び、チラシやパンフレット、ポスターなど、使えそうな資料をもらってくる。

これがなかなか楽しいのだ。

そして、模造紙や発泡スチロールなどのボードに資料を切り貼りして、プレゼン用の資料を作る。これを使って自分たちのプランを説明するのだが、どの程度、どの部分を英語にするかは、生徒の実態や使える時間による。

ポスター・セッションの形式で、体育館などで一斉に実施するともっと面白くなる。2クラス同時展開にして、1クラスはプレゼン、もう1クラスはお客さんになるという形式にすると、とても楽しいダイナミックな実践になるのである。

いずれも私自身がすでに実践したもので、かなり手ごたえのあった活動である。*Captain* には、ハワイ、カンボジア、タイなど、他にもいろいろな国々が登場するので、題材にはことかかない。

### ■英語で歌おう、J-pop！一言葉と文化一

もう1つ取り上げておきたいのは、『世界に一

つだけの花』や『守ってあげたい』など、日本の歌を英語にした教材である。*Not No.1 but the Only One* (I, 第1課) と *One of a Kind* (I, Have a Break! 1) が前者で、*You Don't Have to Worry* (II, Have a Break! 1) が後者だ。

生徒は本当に英語の歌が好きだが、日本語の歌を英語で歌うのも、意外性があるとなかなか楽しいものだ。歌いなれた歌詞がどんな英語に姿を変えているのか、ちょっと好奇心を刺激され、英語の歌とはまた違った緊張感もある。

『英語教育』の増刊号(2007年10月)の特集は「声に出して読みたい英語」だが、ここには『翼をください』が紹介されている。『翼をください』や『世界に一つだけの花』など、日本の若者なら誰でも知っているような歌は、国際交流の場などで披露するにはピッタリだ。

簡単に歌唱指導をするだけですぐに参加者みんなで歌えるので、生徒にとっては、英語学習で手に入れた財産の1つになるはずだ。

また、最後に自分の好きな歌(の一節)を英訳して一枚文集などにまとめると、優れた自己表現活動になる。その歌が好きな理由も日本語で書いておいて授業で読みあうと、相互理解につながる価値ある作品集ができるのである。

ただし、教科書をキチンと、自信をもって読めるようにするための発音指導や音読指導自体が、異文化理解だということも忘れないでおきたい。

英語の音こそが最初に出会う異文化なのであり、自分に自信が持てるということもまた、国際理解の重要な要素なのである。

阿久悠という作詞家が、「情熱」という言葉を分解して次のように書いている—「情は人を理解したいと思うやさしきであり、熱は自分の気持ちを相手に伝えたいと思う誠意である」

まさにコミュニケーションや異文化理解の本質を言い当てた言葉だという気がする。

(かいき ゆきと・富山県立呉羽高等学校)